

# 庭のレモン 泉北の顔



「泉北レモンの街ストーリー」のメンバーたち。前列左から3人目が代表の苅谷由佳さん(右)苅谷さん提供のレモンを泉北ニュータウンのシンボルにして活動する苅谷さん(堺市南区で9月)

堺市南区の泉北ニュータウンで、レモンを使ったまちおこしの市民プロジェクトが進んでいる。庭先などでレモンを育てて特産品にし、かんきつの香り漂う街にしようという取り組みだ。開始からの5年で増やしたレモンの木は1000本近くになった。関係者は「訪れた人をレモンが迎える街にしたい」と話す。

プロジェクトは「泉北レモンの街ストーリー」。パソコ講師の苅谷由佳さん(右)が2015年夏、ニュータウンに住む知人ら12人と始めた。苅谷さんは堺市の中心部で育った。夫の転勤で北陸など各地を転々とした後、両親が1970年代から暮らした家を譲り受けて05年にニュータウンに移り住んだ。泉北丘陵を切り開いて生まれたニュータウンは緑が豊か。「空気がきれいで、自然が身近にある素晴らしい環境」とたちまち

## 泉北ニュータウン

堺市と大阪府和泉市にまたがる約1557歳の住宅団地。1965年に大阪府が開発を始め、67年に入居が始まった。最盛期には約18万5000人の住民がいたが、2019年12月時点で約12万人まで減少した。65歳以上が約35%を占め、少子高齢化が課題になっている。

気に入り、整備が行き届いた街路を走る「緑道ランニング」が日課になった。仕事の傍ら、「大好きな街を輝かせたい」と、堺市が14年に募集した地

## 堺のニュータウン 5年で1000本 市民が作る特産品

域再生活動のメンバーに手を挙げた。

### 父植えた木に着目

どうすれば地域の魅力を向上させられるだろうかと思いを巡らせるうち、父が約40年前に庭に植えたレモンの木に目が留まった。特別な手間をかけなくても3以上に成長し、もう1本の木と合わせて毎年300個以上の実を付ける。家族では食べきれず、知人たちに配ると「町中でレモンがとれるなんて」と喜ばれていた。

ニュータウンがまたがる隣の和泉市は大阪一のミカンの産地だから、この地域はかんきつ類の栽培に適しているはず。泉北の良さを伝えるお土産品にもなる。そう考えてレモンの栽培をメンバーに提案し、賛同を得た。

地元の園芸店の協力を得て、市民にレモンの苗木を1500〜5000円で販売し、庭に植えたり、ベランダに鉢植えを置いたりしてもら

う。行政から補助金は受けず、通し番号が入った500円の木製プレートも買ってもらう。売り上げを活動費に充てている。木の育て方やレモンを使ったレシピをSNSで共有することで住民同士の交流が生まれ、「まちづくりに参画している」という一体感も次第に育まれてきた。

### 商標取得、加工品も

皮まで使える安心・安全なレモンとして「泉北レモン」の商標を取り、3年前からは地元の業者と協力してマーマレードなど加工品の開発や販売もしている。コロナ禍で延期していた恒例の「泉北レモンフェスタ」は10月31日に泉ヶ丘駅前のひろばで開く予定だ。

「年に20本ずつでも植えてもらえればと始めたが、庭で育てたレモンでの菓子作りが夢ですとか、子どもの誕生記念に植えたいといったさまざまな思いのおかげで予想の10倍のペースで増え、通し番号が990を超えた」と笑顔を見せる苅谷さん。「春に咲く花の甘い香りが街を包むように、これからも活動を続けたい」と話している。

問い合わせはプロジェクトのメール(Demon@senbo-ku-lemon.net)。

【高田房二郎、写真も】



レモンの木にかけるプレートには通し番号が入っている